
彼女と狐 | (仮)

金糸雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と狐―（仮）

【Nコード】

N2871R

【作者名】

金糸雀

【あらすじ】

私、神崎明日香は幼い頃から、いわゆる幽霊や妖怪が見えた。だから、不思議現象には耐性がある。と思う…けど「おい、お前！ 気に行った！ 俺の嫁になれ！」「謹んで遠慮します」…なんで異世界に来て狐に言い寄られないといけないんでしょうか？ 見切り発車。ほぼ一発書き投稿なので色々と適当です。設定とか甘いところが多々ありますが、気楽に楽しんで頂ければ嬉しいです。

プロローグ

その日は、いつも通りの朝だった。

おじいが亡くなってしまってから、他に身よりも無い私はその古い日本家屋に一人で住んでいた。その家はホントに無駄に立派で広かった。なんでそんなに立派だったかというところ、おじいは神崎流剣術二十七代目当主だったから。昔から続く由緒正しい流派だそうなおじいが死んでからは高弟の師範代の一人が道場を継いでいる。私も師範ではあるけど、こんな子娘が人に教えるなんてとんでもないので、辞退している。それに、基本的に私は社交的なタイプではないので向いていないと思う。むしろ、人嫌いの気がある。それに比べて今の当主は本当に良い人で、それにしっかりしているので、おじいも安心だろう。

この家は広い。私一人には広すぎるが、私は一人じゃない。さつきは一人といったが、それは、人間の数だ。

「みんな、おはよう」

私が声を掛けるとあちこちから返事が返ってくる。

『おはよ、う。あすか』

『おはよー』

『お早う。今日も早いわねエ。明日香』

そう。この家には所謂「妖怪」がごろごろ居る。そして、私にはそれが見えるのだ。

昔から、物心着いた時から、私は妖怪や幽霊が見えた。とてもよく。本当に良く見えるものだから、小さい頃は皆には見えないもの、という事がわからなくて、色々言っていたから、とても気味の悪い子供だっただろう。それが理解できる年になっても、人型のモノだ

と、人間と見分けがつかなくて話しかけて、独り言の多い気味の悪い奴扱いだった。でも、おじいは違った。おじいは私の言う事を頭ごなしに否定したりしないで、逆に私に何が見えるのか聞いてくれたり、怖い思いをしたりしたときは一緒に対策を考えてくれたりした。だから、私はおじいが好きだった。もう、おじいはいないけど、おじいに恥じるこのない大人になりたいと思う。

「今日は真剣使ってみようかな」

家のなかの稽古場に移動した私はその壁に飾るようにおいてある真剣を手に取った。銘は『妖切姫』だ。

妖切姫を持つて、ひたすら型をこなしていく。ふと気付くと登校時間が迫っていた。私は道着から制服に着替えるために慌てて走りだした。近道するために、中庭の池を飛び越えていこうとした。が、うっかり足を滑らせてしまった。ああ、足が濡れてしまうと思った。この池の深さは明日香の膝くらいある。けど、何故かそれ以上に体が沈んでいく。

「えっ…！うそっ、がぼっ」

池が明日香を飲み込んだという証は少しの波紋だけで、それもしばらくすればなくなり、水面はまるで何事もなかったのかのように穏やかになった。

第1話 美人の水精の頼みは快く引き受けます。

…苦しい。苦しい！

訳も分らず池に落ちた私は、そのまま縦に横に、強い水流に揉まれていた。上も下もわからず、ただ、すっかり口を押さえて耐えるしかなかった。もうこれ以上無理だ、というところで、急に流れが穏やかになった。急いで水面だと思われる方向に必死に泳いだ。急に水圧が変わると危険だとかいう知識は頭になかった。とにかく息がしたい！

「っはあ、はあ、はあ、」

ついてみるとそこはどこかの山奥の川の浅瀬だった。しかも、何故か夜。山奥だが、月が明るいので視界は悪くない。さっきまで朝で、雀の声がうるさかったのに。そうやって、現状把握にいそしむ私の後ろで大きな水音がした。

振り向くと、そこでは、なにやらグロい半魚人っぽいのと狐が戦っていた。狐の方は満身創痍で、かなりの劣勢の様だ。

『どうか、どうか助けて下さい』

次の行動に迷っていた私の耳にそんな必死な声が届いた。ふと横をみるといつの間にか、綺麗な女の人が居た。かなりの美人だ。しかも、こんな時に悪いが、その焦燥感溢れた必死な形相が美貌をさらに引き立てていた。

「私にどうして欲しいの？」

まあ、美人だってことはおいといて、目の前の女の人は人間ではなかった。薄くむこう側が透けていた。こういう精^{モリ}はたいてい善良だ。彼らには騙すという発想がない。別に頼みを聞いてあげても自

分に損はない。とはいっても、彼らの頼みは返品不可の場合が多いが。

『彼を、その剣で切って下さい！お願いします！私にできることならなんでもしますから』

こんな美人にここまで言われて引くようなら、神崎流剣術師範代の名が廃る！とはいえ、得物なんてもっていない、…と思つたら、あつた。道着の袴の腰ひもの間に挟まっていたのか妖切姫が腰にぶら下がっていた。

「いつの間に…」

得物は良いが、彼とはどっちだろう？狐か？グロい方か？

『水の精の方です』

私の疑問を察知してくれたのか、美人さんはそう言った。水の精というイメージとはかけ離れてるが、魚っぽい方だろう。だが、それは未だ狐と組み合っている。まずは満身創痍な狐から引き剥がそうと手頃な石を拾って投げつけた。見事に当たって奴の注意がこちらへ向く。そこに私はこれみよがしに鼻で笑った。思い通りに怒ってこつちに向かつて来てくれた。

私は川から上がって奴に向かつて構えた。真っ直ぐ馬鹿正直に、奴はこちらに来てくれた。大変やり易い。すごい勢いと形相だったが、小さいころから妖怪に追いかけまわされたこともある私はなんとか平静を保つことができた。それに今は、武器もある。

「神崎流居合・一文字」

そう宣言し、私は妖切姫を横に一閃した。奴は見事にバツサリ真つ二つになった。…あれ？なんで、刀で妖怪？っぽいのを切れたんだろう？今更になって疑問が…美人さんがそう言うから言うとおりにしたけど。もしかして、妖切姫って妖刀？確かに怪しかったけど。

私が愛刀の意外な事実には戦慄していると、真つ二つになったグロ

いの上の気配を感じ、振り返って構えた。折角グロイ断面を見ないようにしてたのに！だが、その人影には敵意がなかった。私は構えを解いた。良く見てみると人影は男で、美人さんと似たような簡素な白っぽい貫頭衣を着ていた。

『夫を助けて頂いて、本当にありがとうございました。お礼に何をしたら良いでしょうか？』

『私からお礼を言わせて下さい。助かりました』

美人さんとその夫さんは2人揃ってこちらに向かって頭を下げた。
「え！？人妻だったの！？…じゃなくて、ええっと、なんで、あのグロイのから旦那さんが出てきたの？」

『見て下さい。こちらの呪いの掛った石に私は誤って取り込まれてしまい、私は凶暴化してしまつて、さらに周りの魚達を取り込んで実体化までしてたんです…魚達には悪いことをしました』

すつと、旦那さんが指さした先にはさっきのグロイ奴の体液で汚れた装飾品が落ちていた。

「へえ。あつもう触つても大丈夫かな？」

『ええ。貴女の一閃で呪いは切り飛ばされて消えてしまったようです』

「ふうん。これがねえ。まあ、貴石は念を込めやすいつていうしねえ」

その呪いがかかっていたという装飾品は、首飾りで、台座が金で出来ており、ウズラの卵くらいの大きさのルビーっぽい赤い宝石を中心にひとつと小さい宝石が数個散りばめられていた。無事だったからかなり高いだろうけど、私の一閃で大きな傷が出来ていた。まあ、本物だろうから、金だし宝石がついてるし。売れば帰りの旅費くらいには…。

「ってそうだ！私、家に帰りたいんだけど、ここどこ？」

『ここは、サルーの川です』

「いや、川っていうのは分かるけど、私の家から見てどこら辺？」

『…そう言えば、貴女はどちらからいらっしやったのですか？』

「え！？貴女が呼んだんじゃないの！？」

『「……」』

状況からてつきりそうなのかと…。

その場に変気まずい沈黙が流れた…。

『お前を「ここ」に呼んだのは、きつとここの川の主じゃないか』

沈黙を破ったのは、背後の声だ。ふと、後ろを向くと、さつき美人さんの旦那さんと戦っていた狐が居た。

『その男を見てらんなくて、適当に「呼んだ」んだろう。それが出来る力を持つてる奴で、かつ今の状況で考えられるのはこの主しかないだろう。大当たりだったな。あれを真つ二つにできるなんて』

「適当に？困るわよ！帰りたいんだけど！」

『ところで、気になってたんだが。まずお前、この世界の人間か？』

「…は？何言つて…」

その、とんでもない台詞に私は思考が停止しかけたが、私は気付いてしまった。

夜空に、月が二つ浮かんでいることに。

第2話 取り敢えず、阿呆な提案は却下します。

「嘘でしょう!？」

『よくわからんが、マジでそうなのか?なんか、匂いがおかしいから適当に言ってみたんだが』

「適当に真実をつつき出さないで!」

『お、おう。悪かった』

私はよつぽど鬼気迫る顔をしていたようだ。狐が何故か怯えて後ずさった。

「…いえ、ごめんなさい。貴方は何も悪くないのよね。ここの主とやらの責任もって私を帰してもらおうじゃない!」

『いや、無理だろう。…せつかくの可愛い顔が台無しだ。そんな顔しないでくれ。いやな?いくらここの主の力が強いといっても、異世から何かを呼ぶなんて出来る訳ない。っていうか、出来る奴なんてこの世のどこにもいないんじゃないか?異世から来た奴のことを「客人」^{マレト}つつーらしいんだが、客人は偶然世界の狭間に落ちてくるものらしい。俺が主が「呼んだ」っていうのは、「この場」に呼んだんであって、「この世界」わけじゃない』

「…結論から言っと?」

『俺らじゃどうしようもない』

私が、気が遠くなつて、その場に座り込んで自分の世界にこもってしまったのはしょうがないと思う。

「うふふふふふふふふふふ。あれゝ花畑の向こうにおじいが見える。うふふふふふふふふふふ」

私はしばらくそうやって現実逃避していた。

「…気を確かに。私。こんなこともあるのかと、私に何かあったら家の権利は現当主に行くことになってるし。うん。私には家族なんていないし。現当主に心配かけさせちゃうけど、その位だし。よし、大丈夫！待たせてごめんね！」

私が現実逃避している間、3人？この数え方で良いんだろうか。皆見守っていてくれたらしい。それはそれで恥ずかしいものがある。大変申し訳なかった。

『いえ、わたくしはかまいません』

『嬢ちゃんそれでいいのか…？』

美人の水精さんが心配したように、狐さんが半ば呆れたように聞いてきた。そうは言っても。

「そうは言ってもどうしようもなさそうだし。どうしようもないものはどうしようもないから、いつまでも同じことでぐだぐだ悩んでたら時間がもったいない」

言いきった私におずおずと美人さんが切りだしてくる。

『それで、お礼なのですが・・・』

「ああ。そうだね。うーん。今は思いつかないから、保留っていうのは出来る？」

『わかりました。ではこれを』

「これは？綺麗だね」

『わたくしが稚魚だった時の鱗です。』

「…稚魚」

この美人さんのちっちゃいころ…グロかったのか可愛かったのか確率は五分五分だな。

『この鱗を持って、水辺でわたくしの名を言ってくださればいつでも、どこへでも参ります。ああ、わたくしの名ティア・リア・サル

ーと申します』

「わかったわ。私の名前は神崎明日香っていうの。またね。ティア・リア・サルー」

『はい。アス力様。このご恩は必ず。アミルデイス様も、本当にありがとうございました。出来れば、わたくし共が貴方をもてなせば良かったのですが…』

『気にしなくていい。旦那と仲良くな』

その狐の言葉に旦那さんの方を見て幸せそうに笑って、美人さんのティア・リア・サルーは旦那さんと一緒に帰って行った。というか、川の中に消えていった。そして、川辺には狐と私の2人きりになった。

「そういえば、あなたもすごい怪我してたよね！？大丈夫！？」

月明かりなのでちよつと断言できないが、本当は綺麗な赤茶色なのだらう豊かな毛並みはところどころがどす黒い血で汚れていた。

『いや、このくらいは大丈夫さ。舐めて寝てれば治る』

「でも痛いでしょう？嫌じゃなかったら手当をさせて」

特に嫌がつているそぶりは無かったので、道着を割いて包帯にしようと思ったが。すっかり忘れてたが、今私は全身濡れ鼠だった。

「湿っててこれじゃ包帯にならない…」

『その恰好じゃ冷えるだろう。目をつぶって少しじっとしてろ』

素直に言うとおりにすると、ぶわっ、つといきなり熱風が全身を叩いて、あつという間に服がきれいに乾いた。

「すごい！」

『俺は炎狐だからな。火は俺の眷族だ』

私の驚いた様子に、気を良くしたのか、ふふんと得意気に狐は鼻を鳴らした。そして、私は道着を割いて、特に出血の酷い所をしばつていく。また、裂いた道着の一部を雑巾代わりにして、傷に触らないように血を落としていく。ちなみに、この狐。狐とはいつでも私より背丈がある。手当は結構な重労働だ。

「これで良し。…大丈夫？」

『大丈夫さ。このくらいの怪我は1日もしないうちに治る。水の精に付けられた傷だから、いつもよりは少し治りが遅いが』

「そつえばどうして、ティアの旦那さんと戦つてたの？あの夫婦ともともと知り合い、って訳じゃなさそうだったけど」

『ふ。水を飲みに降りてきてたら、美人が泣いてたからな！手を貸さないなんて男じゃない！…すでに虫が付いててホントに残念だった…』

狐はマジで残念そうだ。マジで。人間だったら血の涙を流してるだろうってくらい悔しがつてるぞ。

「…どつちかというと、虫はあんたの方でしょ。その場合。それに、相性悪いのはわかりきってたでしょ？」

『話掛けた時は、美人だ、ってことしか頭になかった』

「あ、そう…」

良い人…いや狐かと思ってたらただの馬鹿だったか。結局旦那さん助けたの私だし。

「これからどうしようか…。って、あ！今、夜だし、せめて朝になるまで世話になれば良かった！」

どうしよう、今から呼ぶのはいくらなんでも恥ずかしい。

『ところで、ええっと…』

「私は神崎明日香」

『そうだ。アスカ。お前、良い雄はいるのか？』

「いきなり何？恋人って事よね。いないよ。それがどうかした？」

『そうか。…ところで、俺に素晴らしい提案があるんだが』

「何？」

『これからの寢床の心配も、食い物の心配も何もしなくて良い』

「へえ！なにになに？」

『俺のところに嫁に来い！』

「……はい？」

『お前は住処が出来る。俺には可愛い嫁が出来る。お互いが満足出来る素晴らしい提案だろう？』

この狐、滅茶苦茶得意気に言いきった。

「却下」

『なに！？どうして！？』

即答した私に心底疑問に満ちた声を上げる狐。…本当に分からないのかコイツ…。

「理由は二つ。ひとつはあんたが狐だから。私は人間の男と結婚したいの」

『大丈夫！愛があればなんとかなる』

「ふたつめ。さっきまで人妻口説こうとしてたその口の根も乾かない内に、他の女に求婚するような男は例え人間でもごめんだ」

『何の話だ？俺はお前しか見えて無いぞ！』

「…今さっき、私にティナの旦那さんをお邪魔虫扱いした台詞をぬかしてたのは？」

『…チツ。言うんじゃないかった』

「寝言言っでないでさっさと帰れ」

『俺が帰ったらお前、どうするんだよ』

「どうにかする。サバイバル技術は一応ある」

おじいに通り叩きこまれたから。やってるときは何でこんなのが必要なのか分からなかったが。「人生何が役に立つかわからん」っておじいが良く言ってたけど、ホントに分かんないもんだな…。異世界に飛んじやうなんて可能性は流石に思ってたかどうかだろうけど。

さて、今日は食べ物とかどうしようもないけど、取り合えずこん

な見晴らしのいいところで寝る訳にはいかない。川辺の森の方へスタスタ歩いていく私を見て、何を思ったか知らないが、狐は大きく息を吐いた。

『アス力。取り敢えず今日は俺と一緒に寝るといい』

「私のような乙女に、さっき口説いてきたケダモノと一緒に寝ると？」

鼻で笑ってことさら冷たく言ってやったが、狐は怯まなかった。

『キリアスのアミルデイスの名に誓って、アス力、お前の許しなくお前に手を出したりしない。これでどうだ？』

こういうモノにとって、名は大事なものだ。相手に自分の名を、特に真名を掴まればそれは、命を握られるのに等しい。だから、彼らが自分の名を持ちだしてくるというのは、つまり、最上の敬意を表す。さっきから、アホみたいな言動をしているが、体も大きいし、かなり力のある奴なのだろう。なんとなくそんな気がする。そんなモノが、わざわざこんな小娘相手にここまで礼儀正しくするなんてアホかもしれないが、本当に良い奴なのかもしれない。

「じゃあ、お願いします。本当は面倒臭かったんだよね」

私達は川からちよつと入った森の中で寝ることにした。私は狐の傷に障らないように、狐に体を寄せて眠りについた。体感時間では朝だから寝れるか不安だったけれど、水に落ちて、グロいの一戦やらかしたことで心身ともに気付かないうちに疲れていたらしい。目を閉じるとすぐに眠気が襲ってきた。

第3話 兎に角、言葉を覚えないと。

翌日。私は自分の顔を照らす朝日で目が覚めた。

『お早う。アスカ』

「おはよう。ってあれ？」

起きると何故か見覚えのない、やけにあったかい毛布が目の前にどん、と存在していた。

「ん。…あれ？これ何？…って、ああ、そうか、私、異世界に来たんだっけ…」

そうだ。これからのことを考えなくてはならない。

「さて。じゃあ、ええつと…」

心の中で狐狐言ってたからこいつの名前が…。

『俺の名前はアミルデイスだ』

「そう。あみるじす…ってアレ？あみる…あみいデイス？」

あれ？ちゃんと発音出来ない！…そういえば、

「あのさ、あみいるでいす。私達って今何語喋ってる？」

『言いにくかったら、デイスでいいぞ。今何語喋ってるか？いや、言語は関係ない。俺はこの言葉で喋ってるし、お前はお前の国の言葉で喋ってるだろう。意思が通じるのは、まあ、人間っぽく言うなら一種の念話みたいなもんだ。って言やあいいか？…そーいやあ、お前、あの水精の姿が見えてたなあ。最近の人間は精霊の姿が見えない奴が多いのに。「客人」だからか？』

なるほど。精霊の意思疎通の仕方ってそうなのか。良く考えたら、物理的な声帯があるわけじゃなし。もしかしたら、気付かなかっただけで、元の世界でもそうだったのかもしれないな。

「そう。ありがと。疑問は解消したわ。で、私があの人さん達の姿が見えたのは、元々そういうのが見える性質だったから、他の「客人」がどうかはわからないわ」

『ふうん。そうか』

「そう言えば、貴方もよく私が異世界から来たって分かったね」

『妙な匂いのマナを纏ってたからな。あと、じじい共に「客人」の事を聞いたことがあったからな。適当に言ってみたら大当たりだった、って訳だ』

「マナって？」

『マナが分からねえのか！？ いや、魔術士どもでもなけりゃあ、普通の人間も知らねえか。マナつつーのは、何ていうか、世界中にある力の事だ。そこらへんにもあるが、普通の人間じゃあ見えねえか』

「うーん。空気みたいにそこらへんにあるってコト？」

『ああ』

「所謂、「気」ってことかあ」

それなら分かる。ある程度使えないと、神崎流は名乗れない、と言って良い程うちの流派では気は重要視されている。

『よし。俺が人里まで連れて行ってやる。背に乗ると良い』

雑談がひと段落したところで、大変有難い申し出をされた。本当に有難い！が、問題が。

「あ、ありがとぅ…ってちよつと待って！私、この世界の言葉、一種類も知らない！どうしよう！？」

『そうだなあ。よし。じゃあ、言葉の通じる俺と夫婦になるのが「馬鹿言ってる」と叩つ切る」そうだな。どうするか』

本当にこりないな。この狐…これがなかったら、素直に良い人…じゃなくて狐だと感謝できるのに。

『おお！そうだ！面白いモンもらってたこと思い出した！とりあえ

ずうちに来い！…いや待て待て！刀をしまえ！下心はねエから！…
ああ、そうだ。別にお前を連れて行かなくても大丈夫だった。すぐ
にとつて来るから待つてくれ。危ないから、そこ動くなよ！」

何故か私が乙女として当然の行動を取ると、そう言つて、説明も
なしにあつという間に目の前から消えた。

「いや、すぐにつて言つても…。もうちょっと説明しようよ」

いやまあ、最初に変な事言つたからつてちよつと脅しすぎたかも
しれないけどさ。すぐとは言つても、しばらく掛るだろう。そこら
辺を散歩でもしようかな。

『あれ！？アスカ！？どこに行つた！？』

本当にすぐ歸つて来たな！？そんなに近かつたのだろうか。いや、
近づいてみると、かなり息が荒い。本当に急いでくれたのか。

「ここにいろよ。勝手に消えたりしないつて。ありがとう。急がせ
ちやつたみたいだね」

『いやいや。惚れた女の為に力を尽くすのは男の甲斐性だ。惚れた
か？』

「で、デイス。何を持つてきてくれたの？」

訳の分からない言葉が聞こえた。本当に訳の分からない寝ぼけた
台詞だったので、きつと空耳だろう。

『…泣いて良いか？』

「何を持つて来てくれたの？」

『…これだ』

「これ、本？」

『ただの本じゃあない。これは、俺が人間の道具を蒐集するのが趣

味の奴から、賭けででぶんどった物なんだが、魔術士の作品でな。実は立派な魔導具…らしい。これを使うと、言葉が分かるようになる…らしい』

「さつきから、らしいが多いわよ」

『仕方ないだろう。もらいものなんだ』

「何で良く分かんない物なんてとったのよ」

『いや、そいつ。これ見つけた時に上機嫌で押し掛けて自慢しに来て、こっちの都合を考えず、三日三晩居座りやがったから腹いせに「ちなみに、何の邪魔をされたの？」

『あのときは、滅茶苦茶可愛い木の精口説いてる真つ最中だったんだ！あいつ、あの子の樹の前に居座って話しまくりやがって！おかげで、それにうんざりしたあの子に振られたんだよ！』

「…あんだ、さつきからそればかりよね」

この短い時間で。一日も経ってないぞ。

『もちろん今は、アスカ一筋だっ！』

「で、この本の使い方は？」

『知らん！…待て待て待って！たぶん表紙に書いてあるのが、使い方だから！今から読むから！』

私の顔から何かを察知したらしい。ようやく話を進める気になったか。最初からそうすれば良いのに。

『ふむふむ。…うん。どうやら、開いて中を見るだけでいいらしい』

「それだけ？」

『それだけだ。…ああ、封印がしてあるな。解いてやるっ』

本に巻かれていたベルトは、アミルデイスがそう言って触っただけで燃え落ちた。折角セットになってたものを燃やしていいんだろうか？…いいんだろう。持ち主はアミルデイスなんだし。

「じゃあ、開けまーす…」

魔法の本で言語学習…ちょっと童心に帰ってときめいてしまう。幼いころから妖怪やら幽霊やら見えていたので、どこかに魔法もあ

るだろう、と口に出したことはないが、薄ぼんやりと信じていた。こんなところでお目に掛れるとは！パタツつと開けたその中身は…

「なんだ、真っ白じゃない。…これ偽物なんじゃ…」

そう言つて顔を上げようとしたが、顔が上がらない。いや、本から顔をそらせない！視線を外せない！何かが私を縛り付けている！

「何…これ…」

体の自由が利かない。そして、自分の頭の中からささやき声が聞こえてきた。最初はボソボソとしていたが、だんだん大きくなる。その声は何人の人のものなのか、男なのか女なのか、若いのか老いているのか、何故か全く分からない。ただただ、声は大きく、いや、増えていく。

異常現象に背筋に冷たい物が走るが、これは魔法的な睡眠学習なのだろうか？と、頭の一部はそんな呑気な感想を吐き出していた。そんな事を考える間にも、不快感は増していく。やがて、不快感だけではなく本当に頭痛もしてきた。頭に声がどんどん詰め込まれて、圧迫されているようだ。痛い本当に痛い！

『アスカ！？大丈夫か！？』

痛みはどんどん増して行き、私にはアミルデイスのその慌てた声も認識出来なかった。そして、私は意識を失った。

第4話 戦慄。気を取り直して人里へ。

気がついた時にはもう、陽は随分高くなっていた。

「あれ…？私…」

『大丈夫か！？本開いたらいきなり倒れたんだぞ、お前』

「うん。急に頭が痛くなってる…」

そこまで思い出したところで、何か嫌な予感がしたので、本をもう一度見てみた。開く気はさらさらなかったが。そして、本とついでにベルトの燃えさしを観察した結果、私はそれらに書いてある字が理解できるようになっていた。そして、その喜びよりもまず。

取り敢えず、無言でアミルデイスを妖切姫で一（さすがに鞘からは抜かなかったが）力の限り叩いた。

『何すんだよ！いきなり！』

「デイス…良く見て御覧なさい。貴方が燃やしたベルトの切れ端」

『何々…危険？…注…意？』

「そして、本の裏表紙」

『何か、メモが貼り付けてあるな…安全上問題あり。成功確率は3割以下。適合できない場合脳を破壊され…死亡す、る…』

お互い向かい合ってうふふー、あははーと笑い合った。笑ってごまかそうとしやがったからもう一度叩いた。今度はさりげなく米神を狙った。狐の米神の場所が合ってるか心配だったが、杞憂だったようだ。狐は声^{バカ}を詰まらせて転がり回っている。自業自得だ。なんつーものを読ませやがった。

『わ、悪い。気付かなくて…。でも悪気はなかったんだ！』
「あつてたまるか！」

ちよつと命の危険と隣り合わせになった私はちよつと動揺してしまい、なんやかやと狐とじゃれてしまった。シャレにならない恐怖を感じたのは、師範代試験の時のおじいのしごき以来だったから…。もうこれで二度とあんな恐怖を感じなくて済むと、当時は思っていたのに…！

結局、すったもんだの末、時間的にランチになってしまったが、デイスが木の実等の食糧を貢ぐことでチャラという事になった。微妙に変な色と形をしていたが、美味しかった。腹ごしらえが済んだところでやつと人里に向かう事になった。

「では、人里までお願いします」

『おう！安心して俺に任せろ！どう頑張っても間違いないで起こらないからな！』

「これで何か問題があったら情けないにも程があるよね」

ボソツと私がそう言うのと耳としっぱを垂らして目に見えてしょんぼりした。うむ。いけない。まだ、さっきの恐怖体験で心が荒んでいる。

「まあ、よろしく。頼りにしてるから」

そう言うのと、今度は目に見えて張り切りだした。あんまり勢いよく振っているのしっぱがどこかに飛んでいきそうだ。単純な奴だなあ。

デイスの背に乗り、人里に向かつていく。その速度（足）は早い。主に木等の障害物が多い山の中を正に風のように、走り抜けて行く。下手なジェットコースターよりも迫力満点でとても楽しい！落ちないようにしがみつくのはちょっと骨が折れるが。

などと、アス力は思ったが、普通の人間はいつ木にぶつかるんじゃないかと心配で楽しめる様な移動法ではない。その途中、デイスがそう話しかけてきた。

『で、人里に下りてどうするんだ？』

「どうしようかなあ…。兎に角、手に職付けて生活していかないと…。何かオススメの職業とかない？」

『さあ…。ここ最近是人里に行つてないからなあ。どうなってるか良くわからん。悪いな』

「ううん。送ってくれるだけでも十分助かる。ありがとう」

感謝の気持ちを込めて、苦しくない程度に少し力を込めて首に抱きついた。

『こ、このくらい、大したことは無いさ』

何故か少し慌てたような声を出して、急に速度を上げた。

「うわっ！ちよつと!？」

『この調子じゃ陽が暮れる！すこおーし急ぐぞ！』

そう言つて、デイスは何かを振り切るようにひた疾走^{はし}った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2871r/>

彼女と狐 | (仮)

2011年3月7日00時10分発行